古代大和史研究会(65)　2024 年 7 月 23 日（火）於：奈良県立図書情報館 正木裕

第二部：「済と興」の崩御原因と年代

①倭王武の上表文
②「珍」の百済南西部への駐留と「済」の即位と崩御
③「対高句麗戦」での済・興の崩御
④「諒闇（服喪）」期間を経て武は高句麗討伐に臨む

古代大和史研究会（68） 2024 年 10 月 22 日（火） 於：奈良県立図書情報館
倭の 5 王時代の終焉から磐井へ 正木裕

古代大和史研究会（66） 2024 年 8 月 27 日（火） 於：奈良県立図書情報館
「倭の５王」と半島諸国との攻防 正木裕

古代大和史研究会（64） 2024 年 6 月 25 日（火） 於：奈良県立図書情報館
1 世紀から倭の 5 王に至る倭国の対外戦史

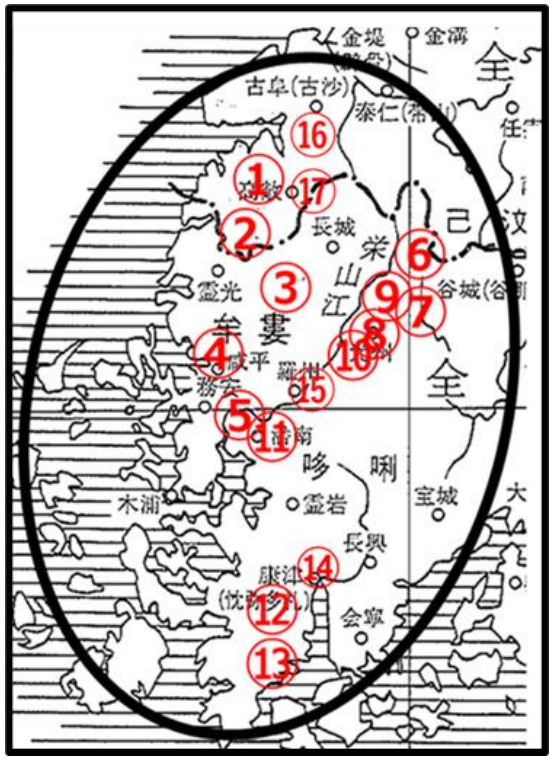
市民古代史の会・京都 2024 年春の講演会 3 月 30 日（土） IN キャンパスプラザ京都 正木裕
九州勢力の半島進出と撤退 -- 百済西南部の古墳から考える

古代大和史研究会（65）2024年7月23日（火）　於：奈良県立図書情報館　正木裕

第二部の始めに：中国史書と『書紀・好太王碑・三国史記』等に記す倭の5王の4世紀末～5世紀の半島進出

１，「倭の5王」は5世紀に中国王朝に朝貢した5人の倭王「讃珍済興武」を言う。
２，通説は仁徳ほか『書紀』に記すヤマトの天皇とする。
３，しかし「讃珍済興武」の名は『書紀』に見えないし、続き柄・在位年数・在位期間がヤマトの天皇と一致しない。
４，『書紀』には中国史書に記す中国王朝への遣使や官位下賜の記事も無い。
５，5世紀後半～末に高句麗の攻勢で崩壊した百済を倭国が復興。『書紀』には、その時に戦ったのは「筑紫国の軍」と記す。
６，そのころ百済内意西部に北部九州様式の古墳が多数造営され、古墳の埋葬物も北部九州と共通しているが、6世紀前半の任那滅亡時期に一斉に姿を消す。
６，倭王が高句麗と戦うに際し、共通の型紙を用いて制作したとされる甲冑は全て九州で出土している。

こうしたことから「倭の5王」とは九州の大王たちだったと考えられる。



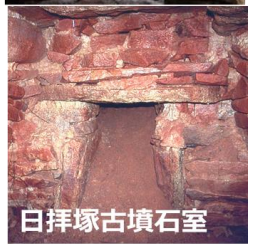
「讃」＝履中、「珍」＝反正説：在位年数が合わない

宋書によれば讃・珍２代の在位年数の合計は少なくとも26年以上だが、『日本書紀』では履中（6年）、反正（5年）と、2天皇の合計在位年数は11年で、讃＝履中、珍＝反正は不成立。

「讃」＝仁徳、「珍」＝反正、「武」＝雄略も不成立

『宋書』では讃は珍の兄だが『書紀』では仁徳と反正は親子で、讃＝仁徳、珍＝反正も不成立。雄略（456～479）と「武」502年梁に朝貢は年代が合わない。

海南長鼓山古墳


日拝塚古墳石室

中国史書と『書紀・好太王碑・三国史記』等に記す「倭の5王」の4世紀末～5世紀の半島進出の歴史

①391年に倭国（讃）は半島南部（百済・任那・新羅）に侵攻。◆『好太王碑』
②392年に高句麗好太王は反攻をかけ、百済漢江以北まで併合し、百済辰斯王は死去。◆『三国史記』
③392年に倭国の紀角宿禰等、阿花王を擁立、王として帰る。◆『書紀』応神紀
④396年に阿花王は好太王の攻勢に屈して高句麗に臣従する。◆『好太王碑』
⑤397年に倭国（讃）は東韓一帯を占領。百済は倭国に臣従し直支（後の腆支王）が倭国に出される。◆『書紀』応神紀
⑥400年に高句麗は新羅を救援、任那・加羅地域にも出征し、この攻勢により百済は再び高句麗に臣従。◆『好太王碑』
⑦404年に倭国（讃）は反転攻勢をかけ、半島の奥深く侵攻。◆『好太王碑』
⑧405年の阿花王崩御に際し、倭国（讃）は百済腆支王（てんしおう・ときおう）を擁立し、漢城で即位させる。◆『書紀』応神紀、『三国史記』
讃：413年に東晋に朝貢。（『晋書』安帝紀、『太平御覧』）
讃：421年に宋武帝に朝貢、除授。（『宋書』夷蛮伝）
讃：425年に司馬曹達を派遣、宋文帝に朝貢。（『宋書』夷蛮伝）
珍*：430年1月に宋文帝に朝貢・（『宋書』文帝紀）
⑨431年に、倭国（珍）は新羅に侵攻し明活山城（慶州市）を包囲。◆『新羅本紀』
⑩435年頃に倭国（珍） は百済王族の抵抗を抑え百済南西部を支配。◆『書紀』仁徳紀
珍：438年に宋文帝に朝貢。「使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王」を自称。「安東将軍倭国王」に除され、倭隋等13人が平西・征虜・冠軍・輔国将軍号に除される。（『宋書』夷蛮伝）

中国史書と『書紀・好太王碑・三国史記』等に記す「倭の5王」の4世紀末～5世紀の半島進出の歴史

⑪444年に、倭国（珍）は兵を遣し金城を10日囲むが、兵糧が尽き撤退。新羅王訥祇麻立干（とつぎまりつかん）は無理にこれを追って戦い兵の半数を失い撤退す。◆『新羅本紀』

済：451年に宋文帝に朝貢。「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事」が加号される。23人が軍郡（将軍号・郡太守号）を与えられる。（『宋書』夷蛮伝）

⑫455年に、高句麗は百済に侵攻する。◆『新羅本紀』、『高句麗本紀』

興：460年12月に、宋孝武帝へ朝貢（『宋書』孝武帝紀）

興：462年3月に、宋孝武帝、興を「安東将軍倭国王」に除す。（『宋書』孝武帝紀、夷蛮伝）

⑬475年に高句麗長寿王、百済を討ち事実上百済は崩壊。◆『新羅本紀』『高句麗本紀』『書紀』雄略紀

武：477年11月に、宋順帝へ朝貢。（『宋書』順帝紀）武は「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王」を自称。（『宋書』夷蛮伝）

武：478年に宋順帝に高句麗の無道を上表し、「開府儀同三司」を自称、叙正を求める。順帝、武を「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭王」に除す。（『宋書』順帝紀、夷蛮伝）

⑭479年に倭国（武）東城王を軍事力で擁立し高句麗を討つ◆『書紀』雄略紀

武：479年に南斉の高帝、倭王武を「鎮東大将軍」（征東将軍）に進号。（『南斉書』東南夷伝）

武：502年に梁武帝、倭王武を「征東大将軍」に進号。（『梁書』武帝紀）

「讃」369年誕生・390年即位（神功の没年が389年・応神即位＆玉垂命の薨去が390年）～425年朝貢・・（弟）「珍」430年頃即位・・438年朝貢・・「済」443年頃即位～451に朝貢～455年ごろ高句麗の百濟侵略に係って崩御。・（世子）「興」456年ごろ「済」の崩御をうけて即位・・462年朝貢～ 475年の高句麗戦に係って崩御。（弟）「武」476年ごろ即位。478に宋に上表～502朝貢・・～？崩御・・（517・九州年号継体元年「磐井」へ？）

第二部「済と興」の崩御原因と年代を『宋書』倭国伝と「倭王武の上表文」から探る

倭国は高麗の東南大海の中にあり、世々貢職を修む。 高祖の永初二年（421）、詔していわく、「倭讃万里貢を修む。遠誠宜しく甄（あらわ）すべく、除授を賜うべし。」と。 太祖の元嘉二年（425）、讃、また司馬曹達を遣わして表を奉り方物を献ず。

讃死して弟珍立つ。使いを遣わして貢献し、自ら使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍、倭国王と称し、表して除正せられんことを求む。詔して安東将軍・倭国王に除す。珍、また倭隋等十三人を平西・征虜・冠軍・輔国将軍の号に除正せんことを求む。詔して並びに聴す。（＊『宋書』文帝紀。「元嘉十五年(438）四月己巳。倭国王珍を安東将軍とす」。）

二十年（443）、倭国王済、使いを遣わして奉献す。また以て安東将軍・倭国王となす。

二十八年（451）、使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事を加え、安東将軍は故のごとく、ならびに上る所の二十三人を軍郡（＊「郡太守」郡の長官）に除す。 済死す。世子興、使を遣わして貢献す。

世祖の大明六年（462）、詔していわく、「倭王世子興、奕世（えきせい・代を重ね）忠を戴し、藩を外海に作（な）し、化を稟（う）け境を寧（やす）んじ、恭しく貢職を修め、新たに辺業を嗣ぐ。宜しく爵号を授くべく、安東将軍・倭国王とすべし。」と。

興死して弟武立ち、自ら使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大将軍、倭国王と称す。

順帝の昇明二年（478）、使を遣わして上表していわく、「封国は偏遠にして、藩を外に作す。昔より祖禰躬（みずか）ら甲冑を擐（つらぬ）き、山川を跋渉し、寧処に遑あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐること九十五国、王道融泰にして、土を廓（ひら）き、畿を遐（はるか）にす。累葉朝宗して歳に愆（あやまら）ず。臣、下愚なりといえども、忝なくも先緒を胤（つ）ぎ、統（す）べる所を駆率（くりつ）し、天極に帰崇し、道百済を遙（へ）て、船舫を装治す。しかるに句麗無道にして、図りて見呑を欲し、辺隷を掠抄（りゃくしょう）し、虔劉（けんりゅう）して已まず。毎に稽滞（けいたい）を致し、以て良風を失い、路に進むというといえども、あるいは通じあるいは不（しか）らず。臣が亡考済、実に寇讐の天路を壅塞（ようそく）するを忿（いか）り、控弦百万、義声に感激し、方に大挙せんと欲せしも、奄（とも）に父兄を喪い、垂成の功（もう少しで達成できる功労）をして一簣を獲ざらしむ（最後の務めが果たせず）。居しく（いしく・かしこまって・身を慎んで）諒闇にあり兵甲を動かさず。これを以て、偃息（えんそく・やすむ・中断）して未だ捷（か）たざりき。今に至りて、甲を練り兵を治め、父兄の志を申べんと欲す。義士虎賁（こほん）文武功を效（いた）し、白刃前に交わるともまた顧みざる所なり。もし帝徳の覆戴（ふさい）を以て、この彊敵（きょうてき）を摧（くじ）き克（よ）く方難を靖んぜば（わざわいをおさめれば）、前功を替えることなけん。窃かに自ら開府儀同三司を仮し、その余は咸（み）な仮授して以て忠節を勧む。」と。詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍、倭王に除す。

「珍」の百済南西部への駐留と「済」の即位と崩御

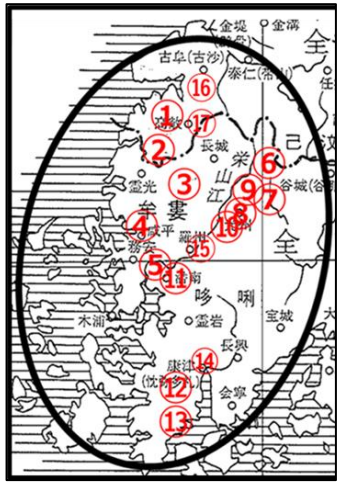
「珍」の百濟南西部支配

435年頃に倭国（九州王朝）「珍」は百済王族の抵抗を抑え百済南西部を支配

◆『書紀』仁徳41年（実年435年ごろ）紀角宿禰を百済に遣して始めて国郡の壇場（さかい）を分ちて、具（つぶさ）に郷土所出（くにつもの）を録す。是の時に、百済の王の族酒君、礼无し。是に由りて、紀角宿禰、百済王を訶（ころ）ひ責む。時に百済の王悚（かしこま）りて、鉄の鎖を以て酒君を縛（ゆ）ひて、襲津彦に附けて進上す。

境界設定と郷土所出作成は倭国が百済の一部を事実上占領し、「郷土所出（税（貢納品）の徴収台帳）」を作成したことを示す。阿花王時代に百済中南部は倭国の支配下に入っているから、435年頃に百済南西部を支配したと考えられる。これは毗有王が433年に新羅と和したことへの報復。酒君は倭国の占領に反対したため倭国に引き渡された。

従って漢城に倭国勢力が進出するのは4世紀末から5世紀初頭、栄山江流域に北部九州の勢力が本格的に駐留するのは5世紀中葉以降となり、「百済の中央政府があった首都圏一帯の工房で、栄山江流域の倭系遺物より時期が早い5世紀前半の埴輪が出た」という考古学の状況は文献と合致する。



「済」の即位と崩御

＊『宋書』太祖20年（443）、倭国王済、使いを遣わして奉献す。また以て安東将軍・倭国王とす。

『宋書』太祖21年（444）に、「済」は兵を遣し新羅金城を10日囲むが、兵糧が尽き撤退。新羅王訥祇麻立干（とつぎまりつかん）は無理にこれを追って戦い兵の半数を失い撤退す。◆『新羅本紀』444年（訥祇麻立干28年）四月。倭兵金城（クムソン・新羅首都・現慶州市）を十日囲むも、糧盡きて乃ち歸る。王、兵を出し追はむとす。左右曰く、「兵家説きて曰はく『窮寇追うなかれ』と。」（略）王聽かず、數千餘騎を率いて、追ひて獨り山の東に合戦し、賊に敗れ、將士死者過半。

「讃」‥413～421～425‥
（弟）「珍」‥438‥
「済」‥443～451‥‥
（世子）「興」‥462‥
（弟）「武」‥478～502‥。

「対高句麗戦」での済・興の崩御

「済」は「軍郡」を置き「珍」時代よりの半島支配をさらに固め崩御する

済死す。世子興、使を遣わして貢献す。

『宋書』太祖28年（451）、使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事を加え、安東将軍は故のごとく、ならびに上る所の二十三人を軍郡（＊「郡太守」＝軍事指揮権を有する郡の長官、中国の郡は県の上位）に除す。 23人の「軍郡」は半島支配地の長官でコロニーの核となった前方後円墳の埋葬者か

455年に、高句麗は百済に侵攻する。

「済」の崩御はこの戦が原因か

◆『高句麗本紀』454年（長寿王の42年7月）「兵を遣して新羅北邊を侵す。」
◆『新羅本紀』455年（訥祇麻立干39年）十月、高勾麗、百済を侵す。

「讃」‥413～421～425‥
（弟）「珍」‥438‥「済」‥443～451‥‥
（世子）「興」‥462‥
（弟）「武」‥478～502‥。

475年高句麗長寿王百済を討ち事実上百済は崩壊

「興」の薨去はこの時か

高句麗は475年に百済に侵攻し、王都漢城を陥落させ、蓋鹵王（がいろおう455~475 ）を誅殺し、男女八千人を捕虜とした。子の文周王（477年に暗殺）は逃れ熊津に遷都したが、事実上百済は崩壊。

◆『三国史記』「高句麗本紀」長寿王63年（475）9月、王兵三萬を帥ゐて百済を侵し、王所都漢城を陷し、其王扶餘慶を殺して男女八千を虜として歸る。

◆『三国史記』「百済本紀」蓋鹵王21年（475）秋九月、麗王巨璉（長寿王）兵三萬を帥ゐ來りて王都漢城を囲む。王城門を閉じ出で戦うこと能わず。麗人兵を四道に分け挟み攻つ。又風に乗せ火を縱（ほしいまま）に城門を焚燒く。人心危懼（おそれおののき）、或は出て降はむとする者あり。王、窘（くるしみ）図る所しらず（どうしようもなく）數十騎を領ゐて、門を出て西に走（に）ぐ。麗人追いてこれを害す（殺害）。

◆『書紀』雄略20年（476＊）冬、高麗王、大きに軍兵を発（おこ）して、伐ちて百済を盡（ほろぼ）す。（略）百済記に云ふ、「蓋鹵王の乙卯年（475）冬、狛の大軍來りて、大城を攻むること七日七夜、王城降陷（やぶ）れて、遂に尉禮（いれ）を失い、国王及び大后、王子等、皆敵の手に沒す」といふ。（＊1年ずれ）

「興」の薨去の「諒闇（服喪）」期間を経て478年に武は高句麗討伐に臨む

「倭王武の上表」478年：臣が亡考済、実に寇讐（こうしゅう＝かたき*高句麗）の天路を壅塞（ようそく）するを忿（いか）り、控弦百万、義声に感激し、方に大挙せんと欲せしも、奄（とも）に父兄を喪い、垂成の功（もう少しで達成できる功労）をして一簣を獲ざらしむ（最後の務めが果たせず）。居しく（いしく・かしこまって・身を慎んで）**諒闇にあり兵甲を動かさず**。これを以て、偃息（えんそく・やすむ・中断）して未だ捷（か）たざりき。**今（＊478年）に至りて、甲を練り兵を治め、父兄の志を申べんと欲す。**⇒諒闇期間の後「今に至り」高句麗討伐を決意

「父は済、兄は興」とするのは、「父兄」を「済」の父「珍」と氏名不詳の「済の兄」とする説もあるが、そうすると「父兄の志」とは、「武」にとって「祖父と伯父の志」となり、父の「済」、兄の「興」の志が含まれず不自然だから。

478年に諒闇が明けたのなら興の薨御は475年ごろで高句麗により百済が崩壊した年次と一致

「諒闇（喪に服する）」期間は3年：

◆『論語』「夫れ三年の喪、天下の通（ひとみな）なる喪なり。」『隋書』貴人は三年、外に殯す。⇒「昔より祖禰躬（みずか）ら甲冑を擐（つらぬ）き、山川を跋渉し、寧処に遑あらず。」の言葉通り**興は自ら半島に出陣し、475年の高句麗戦で崩御した**と考えられる。

また、**「済」は**451年～462年の間に崩御。「倭王武」の上表文から高句麗戦で崩御した可能性が高い。そうであれば、**文献上455年の高句麗長寿王の百済侵攻時の崩御が第一候補**となる。◆『新羅本紀』455年（訥祇麻立干39年）十月、高勾麗、百済を侵す。

⇒「奄に父兄を喪い」は通常「奄（にわか）に」と読むが、「済」と「興」の崩御は明らかに年次が違う。従って「奄（とも）に」と読んで2人とも同じ高句麗戦で没したとするのが適切。

「倭王武」は興の崩御をうけ475年に即位し、高句麗討伐の準備を進める。

倭王が高句麗と戦うために型紙で量産した甲冑の出土は全て九州で出土

福岡県久留米市田主丸町麦生益生田（ますおだ）古墳群

宮崎県西都市西都原４号地下式横穴墓１号短甲

宮崎県えびの市小木原１号地下式横穴墓出土

「武」は475年に即位し、高句麗討伐に執念を燃やしたのでは

「済」と「興」が奄（とも）に高句麗戦で斃れたなら、その年次は「済は455年・興は475年」ごろと考えられる

「興」の薨去の「諒闇（服喪）」期間を経て478年に武は高句麗討伐に臨む

「武」が高句麗討伐を決意した478年の翌年に高句麗と戦ったのは「筑紫の勢力」

479年東城王を軍事力で擁立し高句麗を討つ

雄略23年（479）に倭国「武」は末多王を東城王として擁立。末多王は「筑紫国の軍士」に護られて百済に帰国。そして、「筑紫の将軍」が高句麗を攻めた。

つまり475年の百済崩壊後「筑紫の軍士・将軍」らが高句麗と戦い百済を復興させたもので、当時の百済は筑紫の倭国によって守られ、国として維持されたことを表す。

◆『書紀』雄略23年（479）四月、百済文斤王（もんこおう三斤王477～479）薨る。天王、昆支王（こんきおう）の五子中第二の末多王の幼年くして聰明（さと）きを以て、勅して内裏に喚（め）し、親ら頭面を撫で、ねむごろにいましめて、其の国に王とす。兵器を賜ひ、筑紫国の軍士五百人を遣して、国に衛（まも）り送りて、是を東城王（479～501『三国史記』）とす。是の歳、百済の調賦（みつきもの）、常の例より益（まさ）れり。筑紫安致臣・馬飼臣等、船師（ふないくさ）を率ゐて高麗を撃つ。

⇒502年に末多王は廃され「筑紫の島」で生まれた武寧王が即位。

◆『書紀』武烈4年（502*）是歳、百済末多王無道にして、百姓に暴虐す。国人遂に除き嶋王を立て、是を武寧王とす。

倭王武が高句麗に父と兄仇を討つことを誓った478年の翌479年に、高句麗と戦ったのは筑紫の軍だった。このことだけみても「倭王武」は筑紫の大王で、「武」の祖禰」たる倭の五王たちも倭国（九州王朝）の大王だったことがわかる。彼らは自ら戦いの先頭に立ったと自称。倭の5王時代は対外戦に明け暮れ、その中で斃れた王もいたことになろう。

「讃」390年即位（神功の没年が389年・玉垂命の薨去が390年）‥413～421～425に朝貢‥

（弟）「珍」‥438に朝貢‥「済」‥443～451に朝貢～455年ごろ高句麗の百濟侵略に係って崩御。

（世子）「興」456年ごろ「済」の崩御をうけて即位‥462に朝貢～475年の高句麗戦に係って崩御。

（弟）「武」‥476年ごろ即位。478に宋に上表～502朝貢‥～？崩御‥（517・九州年号継体元年「磐井」へ？）